

2019年度 研究部活動報告

◎小岩 大 上園 悦史
荻野 聡 齋藤 貴博
杉坂 洋嗣 八坂 弘
(◎: 研究部主任)

I 本年度の研究体制

1 本年度の取り組み

本年度は、竹早中学校独自の研究と竹早幼稚園・竹早小学校・竹早中学校の連携研究（以下、竹早地区連携研究）の2つについて取り組んだ。

(1) 中学校の研究

1) CCSS プロジェクト研究

昨年度から、大学が自治体と附属学校と連携して進める「附属学校等と協働した教員養成系大学による『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト」の一環として、経済的に困難な家庭状況にある児童の主体的な進路選択を支援する「特別連絡進学制度」の開発と、進学後の「校内支援体制」の開発に取り組んでいる。この目的は、「多様性にかかれた附属学校教育モデル」を開発し、他の附属学校や公立学校に普及還元することである。

今年度は、昨年度に引き続き、校内支援体制の開発、深化のために、特別連絡進学制度で入学した生徒や保護者から多面的にデータを収集した。また、放課後の学習支援やSCとの連携した支援、さらには今年度新たに導入したスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」）による支援についても実践した。そして、収集したデータや実践事例をもとに、校内支援体制をまとめ、深化発展を図った。

2) 多様性の教育

昨年度から中学校独自の研究として「多様性の教育」の研究に取り組んでいる。これは、CCSSプロジェクトを契機に、多様化する未来を見据えた教育の充実という社会的な要請を踏まえ、

竹早中学校の特徴である多様性を見直し、それを生かした教育の充実を図ろうという目的から立ち上がったものである。

研究2年目の今年度は、2つのことに取り組んだ。1つは、昨年度導出した「多様性の教育」の基本枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく授業構想の視点を求めて、2つの視点から実践の検討を行った。2つ目は、「多様性の教育」の目的、換言すれば「多様性の教育」でめざす生徒像について、本校の教育でめざす生徒像と関連を整理し、明確にしながら議論した。研究を進めるにあたって、5月と12月に金沢学院大学の多田孝志先生にご講義をいただき、研究について深めることができた。こうした研究の成果は、2月に開催した公開研修会で、「多様性を理解する」「多様性を活かす」の授業を提案し、全国の先生方に発信し、多くの意見をいただくことができた。また、当日は、多田孝志にご講演もいただき、研究の深化を図ることができた。

3) 「中一中連携」の取り組み

東京学芸大学が定めた「年度計画」の「教育に関する目標を達成するための措置」では、「附属学校と地域との連携体制について検討する」ことが挙げられている。

それを踏まえ、本校では文京区の公立中学校との「中一中連携」の活動を模索してきた。その方策の1つとして、8年前から文京区教育研究会（以下、区教研）にオブザーバーとして参加してきた。今年度も、いくつかの教科で交流を行うことができた。また、年に3回行われる校内の授業研究会では、文京区の先生方にも公開した。

(2) 竹早地区連携研究

1) 研究体制

竹早地区連携研究では、一昨年度から「学びを深める場をつくる」をテーマに研究を進めている。今年度は、昨年度提案した「学びを深める場をつくり、子どもをみとる視点」の再整理と、「学びを深める場をつくる」手立ての検討に取り組んだ。また、2019年11月16日には、「学びを深める場をつくる～「手立て」に焦点を当てて～」というテーマで公開研究会を実施した。

運営は、幼小中3校種の連携委員13名を中心として行い、中学校では、例年同様、研究部員全員が連携委員を兼務した。

研究体制は、これまでの教員の負担軽減を優先する考えを引き継ぎ、それまでの全教員が発達研究部会と実践研究部会の両方に所属するという形ではなく、発達研究部会を連携委員が担い、実践研究部会を全教員で取り組むという形にした^{注1)}。これにより、連携委員は、例年同様、発達研究部会と実践研究部会の両方に所属し、その負担が大きくなるものの、他の教員の負担が軽減されるようになった。また、連携研究会は、例年と同様、年間11回行った。指導案の検討等について、連携研究会の機会だけで足りない場合は、各教科領域で時間を決め、議論する場を設けるようにした。

2) 理論研究部会

理論研究部会は、学びを深める場分科会と発達分科会に分けられる。連携委員13名のうち、学びを深める場分科会に6名、発達分科会に7名が所属した。

学びを深める場分科会では、2つのことに取り組んだ。1つは、昨年度構築した「学びを深める場をつくり、子どもをみとる視点」の見直しである。これは、この枠組みが竹早地区の教師の経験知に基づいてつくられたため、実践的検証の必要があったからである。昨年度の研究紀要、6月に行われた幼小中連携実践研究会での実践をもとに検討した結果、例えば「コミュニケーション力」「論理的に考える力」とい

ったいくつかの汎用的な力を働かせる子どもの姿が確認された。しかしその一方で、それらを束ねる8つのカテゴリについていくつか課題がみえてきた。この課題解決に試行錯誤した結果、昨年提案した枠組みを一度解体し、再度整理しなおすことにした。その際、汎用的な力を構造的に整理しているカリキュラム・リデザイン・センター(The Center for Curriculum Redesign:以下、CCR)の枠組みを基本枠組みとした。再整理の結果、「学びを深める場をつくる視点」を構築することができた。

2つ目は、「学びを深める場をつくる」手立ての検討である。具体的には、昨年度の紀要に掲載されている実践や連携授業研で提案された実践の手立てをもとに、「学びを深める場をつくる視点」の要素である「知識」「スキル」「人間性」「メタ学習」の枠で整理した。その結果、本地区の教員が「スキル」を重視して手立てを講じている傾向があることが分かった。一方で、「手立ての捉えが教員によって様々であることも見え、その整理が次年度の課題として確認された。

発達研究分科会は、主体性の発達の切り口から学びを深める場をつくる手立てについて検討するために、主体性に関する研究成果「主体性の成長過程を示した「ステージステップ」」(以下、ステージステップ)に示された「教師の関わり」の項目を見直し、検討した。今年度は、データマイニングの手法での分析を新たに試み、校種やその接続期における「教師の関わり」の傾向がみられることがより浮き彫りになった。

3) 実践研究部会

実践研究部会は幼小中全教員が所属し、中学校の教員は自分の教科に所属するが、人間グループ(道徳・特活・総合)のみ、教務部、指導部から各1名と研究部から担任をもっている教員2名の計4名が担当した。

本年度の実践研究部会は、「学びを深める場をつくり、子どもをみとる視点」「学びを深める場をつくる手立て」について、6月の連携授業研究

会、10月の事前研究会、そして11月の公開研究会での実践を通して検証し、各教科領域で考えを深めることができた。

今後さらに実践を重ね、「学びを深める場をつくる視点」の精緻化や学びを深める場をつくる手立てを検討することが課題である。

2 研究部分掌

本年度の研究部の分掌は、以下の通りである。

- 附属・研究推進委員会等渉外 (小岩)
- 公開・校内研究会推進 (上園)
- 研究紀要 (荻野) (八坂)
- 研究資料 (杉坂)
- 予算 (小岩)
- 幼小中連携委員会 (小岩) (上園)
(荻野) (齋藤)
(杉坂) (八坂)
- 総合活動 (荻野) (杉坂)
- CCSS (小岩) (上園)
(荻野) (齋藤)
(八坂)
- HATO (上園) (八坂)

以上の分掌で滞りなく活動することができた。

II 研究部の活動経過と内容

1 本年度の研究活動経過

(1) 研究部会・校内研究会

研究部活動【○】の内容と校内授業研究会【◎】の実際の活動は、次のようである。なお、多様性の教育の研究については、研究部会の中で議論した。

- 3月6日 第1回研究部会
係分担、年間計画
- 4月5日 第2回研究部会
今年度の活動方針の検討
- 4月17日 第3回研究部会
連携研究、多様性の研究の検討
- 5月29日 第4回研究部会

連携研究、多様性の研究の検討

- 6月12日 第5回研究部会
多様性の研究の検討
- 7月10日 第6回研究部会
連携研究、多様性の研究の検討
- 9月4日 第7回研究部会
連携研究、多様性の研究の検討
- 9月18日 第8回研究部会
連携研究、多様性の研究の検討
- 10月9日 第9回研究部会
事前研究会の詳細
多様性の研究の検討
- 10月30日 第10回研究部会
公開研究会の運営の詳細
多様性の研究の検討
- 11月27日 第11回研究部会
公開研究会の反省
多様性の研究の検討
- 12月11日 第12回研究部会
多様性の研究の検討
- 1月15日 第13回研究部会
公開研修会の指導案の検討
- 2月12日 第14回研究部会
公開研の運営の確認と公開研修会
の指導案の検討
- ◎ 2月15日 公開研修会
第1学年 道徳、社会科研究授業
- 3月5日 第15回研究部会
公開研修会と今年度の活動の反省

(2) 「中一中連携」の実践

8年前より、文京区の区中研にオブザーバーとして参加している。依然、教科や領域によって差があるものの、着実に活動内容が充実してきている。今後もさらに「中一中連携」を深化させるために、次のことを積極的に行っていきたい。

- ①授業研究会のオープン化と公開研への誘い
- ②区教研への会場提供と参加
- ③研究会等への講師派遣

2 幼小中連携研究活動経過

(1) 連携委員会

竹早地区連携研究では、幼小中の連携委員 13 名と各校種の管理職で構成する連携委員会と全教員参加の連携研究会を中心に活動してきた。連携委員会は、連携研究会の事前に行われ、連携研究会の運営内容が協議され、決められている。

連携委員会の活動は次の通りである。

- 4月 12日 第1回連携委員会
年間計画提案と今年度の運営・方針
- 4月 23日 第2回連携委員会
理論研究部会について
- 5月 9日 第3回連携委員会
理論研究部会について
- 6月 6日 第4回連携委員会
6月 14日 連携授業研究会について
- 7月 9日 第5回連携委員会
7月 22日 連携研究会の内容の検討
公開研の要項について
- 8月 27日 第6回連携委員会
連携研究会の運営について
- 10月 1日 第7回連携委員会
事前研の運営の検討
公開研の運営、要項の検討
- 10月 18日 第8回連携委員会
事前研、公開研の運営、提案の検討
- 11月 8日 第9回連携委員会
公開研の運営と提案の確認
連携紀要の形式の検討
- 2月 18日 第10回連携委員会
公開研、年間の活動の反省、
連携紀要の内容の検討

(2) 連携研究会・連携授業研究会

連携研究会を開催し、連携委員会の提案を全教員で議論し決定していくボトムアップによる運営が竹早地区連携研究の特徴である。

連携研究会【○】の内容と、授業研究会及び公開研究会等【◎】の活動は、以下の通りである。

- 4月 15日 第1回連携研究会
組織発表、活動運営・研究の方向性
- 4月 25日 第2回連携研究会
学びを深める場に関する提案検討
- 5月 21日 第3回連携研究会
6月 15日 授業研の指導案検討
- ◎6月 14日 第4回連携研究会
幼小中連携授業研究会
- 7月 22日 第5回連携研究会
学びを深める場・発達研究の活動
- 8月 27日 必要な分科会のみ実施（半日）
- 8月 28日 第6回連携研究会（全員全日）
公開研の理論研究部会の提案検討
- 10月 3日 第7回連携研究会
公開研の運営、要項、二次案内の
確認、事前研の指導案の検討
- ◎10月 25日 第8回連携研究会
事前研究会（午後）
- 11月 11日 公開研運営の詳細の確認
- 11月 15日 公開研究会前日準備
- ◎11月 16日 公開研究会
- 12月 2日 第9回連携研究会
公開研究会の反省
- 2月 20日 第10回連携研究会
今年度の連携研究の反省
次年度の研究の方向性と計画

以上のように、1年を通して充実した活動を行うことができた。また、次年度の連携研究についても検討され、活発な意見交換がなされた。

3 授業研究会

(1) 校内研究会

今年度は、校内研究として、昨年度から取り組んでいる中学校独自の研究「多様性の教育」について議論してきた。具体的には、協議会の場を利用して、目指す生徒像や「多様性を理解する」「多様性を活かす」の内容について議論を深めた。こうした研究成果は、2月14日の公開研修会にて、菊地圭子教諭による道徳、齋藤貴博教諭による

表1 今年度の授業研究一覧

日時	教科	授業者	講師	教科	授業者	講師
6月 14日 他	国語	荻野 聡	中村 和弘（東京学芸大学）	音楽	中野 未穂	猶原 和子（江戸川大学）
	数学	小野田啓子	中村 光一（東京学芸大学）	美術	杉坂 洋嗣	小林 貴史（東京造形大学）
	理科	八坂 弘	森本信也（横浜国立大学名誉教授）	技術	浦山 浩史	松本 誠之（教育園芸研究家）
	道徳	菊地 圭子	松尾 直博（東京学芸大学）	家庭	酒井やよい	大竹美登利（東京学芸大学名誉教授）
	英語	松津 英恵	高山 芳樹（東京学芸大学）	養護	塚越 潤	朝倉 隆司（東京学芸大学）
10月 25日 他	社会	上園 悦史	大澤 克美（東京学芸大学）	英語	松津 英恵	高山 芳樹（東京学芸大学）
	数学	佐々木陽平	中村 光一（東京学芸大学）	音楽	中野 未穂	猶原 和子（江戸川大学）
	理科	金子 真也	鈴木 一成（東洋大学）	美術	杉坂 洋嗣	小林 貴史（東京造形大学）
	道徳	菊地 圭子	松尾 直博（東京学芸大学）	家庭	酒井やよい	大竹美登利（東京学芸大学名誉教授）
2月15日	道徳	菊地 圭子	多田 孝志（金沢学院大学）	社会	齋藤 貴博	多田 孝志（金沢学院大学）

社会科のいずれも第1学年の実践に具現化し、提案することができた。全国130名程度の先生方と研究を交流し、多田孝志先生（金沢学院大学）からもご助言をいただいて研究を深めることができた。

次年度も、「多様性の教育」の研究を推進するとともに、その中で今年度十分にできなかった授業研究会も実施し、様々な教科の視点から1つの授業を見合い、研究を深める場にしていきたい。

（2）連携授業研究会

今年度は、幼小中連携授業研究会を6月14日、10月25日に表1の内容で行った。この授業研究会の目的は、学びを深める場をつくる実践の深化にあるが、第6期研究からの継続的な目的として連携カリキュラムの検証もある。授業研究を通して、こうした目的に沿った活発な議論が行われた。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究部の活動から

今年度の成果は、大きく2つある。

1つ目は、CCSS研究において、本制度で入学した8人の生徒について継続的にデータを収集し、校内支援体制や具体的な支援方法について深めることができた。特に、SSWを新しく導入し、それを含めた支援体制を開発できたことが大きな成果である。次年度は、SSWの導入によ

り支援効果や支援体制に関するデータを集め、支援体制の深化につなげることが課題である。

2つ目は、「多様性の教育」の研究について、実践の検討を通して基本枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく具体的な授業の姿を検討し、その授業構想の視点を見出すことができたことである。また、先述したように、こうした成果を中学校独自の研究会を開催し、公開できたことも大きな成果である。中学校独自の研究公開は、実に20年以上ぶりであった。

一方、「中一中連携」の一環として取り組んでいる文京区の区中研への参加と交流は、着実に交流が深まっている教科がある中で、交流が衰退している教科も出てきている。こうした現状を踏まえ、引き続き、区中研での交流に積極的に取り組んでいくと同時に、新たな中一中連携の形も模索し、地域連携を発展する方策を考えていきたい。

最後に、予算的に厳しい現状の中で、研究を進めるために必要な機器を購入し、研究環境を整備することができたことも成果である。具体的には、タブレット端末の数を増やすことができた。こうした環境整備が、本校教員の授業力向上に寄与し、本校の教育の幅と深まりにつながることを期待している。

2 連携研究の活動から

今年度の成果は、昨年度の成果をもとに理論研

究を深化できたことである。

学びを深める場分科会では、先述したように、「学びを深める場をつくり、子どもをみとる視点」をCCRの枠組みを基に再整理し、「学びを深める場をつくる視点」を構築したことである。これにより、汎用的な力の要素を構造化することができ、より実践的な枠組みとなった。今後さらに、実践を重ね、やや煩雑な感じがある要素をさらに精緻化し、枠組みを深めることが次年度の課題である。

また、「学びを深める場をつくり視点」に基づいて、第7期研究の焦点である学びを深める場をつくる手立てを整理することができたことも成果である。次年度はこの成果を基に教科領域を超えた「学びを深める場をつくる」手立ての視点を模索することが課題である。

発達分科会は、第6期研究までの研究成果である主体性の発達を切り口に学びを深める場をつくる手立てに関する視点を得ることを目的としている。今年度は、ステージステップにおける「教師のかかわり」の整理を、データマイニングの手法を取り入れながら行った。その結果、各校種や校種間の接続期に傾向が見られることが分かった。このことは、主体性の視点から学びを深

めることにアプローチする可能性を示唆するものといえる。

次年度は、この成果をもとにさらに分析を進め、主体性と学びを深めることの関連づけながら、学びを深める場をつくる手立てについて深めていくことが課題である。

実践研究部会では、連携授業研究会における学びを深める場をつくる実践を通して、教科領域ごとに学びを深める場や学びを深める子どもの姿、学びを深めるために必要な力について考えを深めることができた。今後は、さらに実践を重ね、こうした点を、子どもの姿を基に検討し深めていくことが課題である。

最後に、公開研究会の参観者が440人余と、11月開催としては過去最高の数を記録した。年々、参観者数が増え、竹早地区の連携教育研究が全国の先生方から注目をいただいていることを示していると考えている。今後も、連携教育研究の先駆けとして自覚をもち、全国の先生方の期待に応えられるよう、実践的で、一般性の高い研究成果を提供できるように努力していきたいと強く決意するところである。

(文責 小岩 大)

【参考資料】

注1) 2019年度の連携研究組織図を示す。

